

# 和泉式部の研究

伊藤理恵

## 目次

はじめに

第一章 帥宮挽歌

一 帥宮との愛

二 帥宮の死

第二章 死への想い

第三章 死へ

おわりに

## はじめに

私は中学・高校の頃から古典文学が好きで、大学に入り卒業論文の題目を決める時期になると、迷わず古典文学を選んだ。しかし古典文学といっても多数あり、私は高校時代の先生に相談した。先生は、「和泉式部にしなさい。彼女はとても情熱的でいい。」と、言われた。この一言で大切な卒業論文の題を決めるなんて、軽卒かもしれないけど、「和泉式部はいい。」と、言われた瞬間、何だかズシリと心にくるものがあった。

まず私は、「和泉式部集・和泉式部続集」「和泉式部日記」を読み、これらに関する参考文献をどれと読むことなく読んでいった。

和泉式部への私の知識は、無に近い状態だったので……。歌集を讀んで行くうちに、私は和泉式部が好きになって行った。自由奔放で大胆で、とても王朝時代の人とは思えない所もある。そして私は、いつしか挽歌に心惹かれ始めた。

この論文では、帥宮挽歌を中心として、和泉式部の死に対する考え方を調べて行きたい。

なお、引用の本文は、すべて岩波文庫所収の『和泉式部集・和泉式部続集』（清水文雄校注）によるものとし、（ ）内には引用した歌の番号を示した。このほか、同文庫に入る『和泉式部日記』からも引用した。

## 第一章 帥宮挽歌

### 一 帥宮との愛

和泉式部と帥宮との恋は、彼女の恋人であった帥宮の兄、彈正尹為

尊親王薨去後十カ月を経た頃(夢よりはかなき世の中を歎きわびつゝ明かし暮らすほどに)と『和泉式部日記』に記している頃、橘の花を帥宮からおくられたことから始まる。

帥の宮、橘の枝を給はりたりし

薫る香をよそふるよりは郭公聞かばや同じ声やしたると(227)

返し

同じ枝に鳴きつつをりし郭公声は変らぬ物と知らなむ(228)

最初は、死んでしまった最愛の人の弟として帥宮を見ていた和泉式部であったが、次第に愛情へと変わって行くのである。日記の中に次のような場面がある。

まめやかに御物語し給ひて、「いざたまへ、今宵ばかり。人も見ぬ所あり。心のどかにものなども聞えん」とて車をさし寄せて、たゞ乗せに寄せ給へば、我にもあらで乗りぬ。人もこそ聞けと思ふくくいけば、いたう夜更けにければ、知る人もなし。やをら人もなき廊にさし寄せて、下りさせ給ひぬ。

当時の人の常識では、およそ考えられないことであろう。二人の愛の深さが感じられる。そしてついに帥宮は、和泉式部に南院入りをする。

いとかくつれくにながめ給ふらんを、思ひおきたることなければ、たゞおはせかし。……、たゞ一人あれば、同じ心に物語

聞えてあらば、慰むことやある、と思ふなり。

帥宮のいちぢな気持が、一語一語に込められていて、私の胸をうった。「式部は一時の自己陶醉に走り、恋愛を遍歴することで、自己の思想と運命とを具体化していった。彼女は何としても抒情詩人である。和泉式部日記は、彼女の人生的な恋愛抒情歌のあくまで延長線上にある作品である」(日本女流文学史・古代中世篇)和泉式部「青木生子」と、述べているのが少々心にひっかかるが、日記における和泉式部と帥宮の愛に、私は素直に感動したい。

## 二 帥宮の死

「和泉式部は、寛弘四年(一一〇七)十月二日、最愛の恋人帥宮と死別する悲運にあつた。和泉は、世の妻が夫の死に逢つてするようになり、一年の喪に服し、その間に詠んだ故宮追慕の歌が、『和泉式部統集』に百二十二首(九四〇—一〇六一)収められている」(王朝女流文学史 清水文雄)。どの歌を取つても、せつないほど和泉式部の、故宮に対する思いがひしひしと伝わってくる。この帥宮挽歌群の中で一番多かつた言葉は、「悲し」で、次に多かつたのが、「涙」である。和泉式部は、雪を見たり、花を見たり、思い出の品を見たり、日々の生活の全てが、故宮を思い出させるものとなつて、涙し悲しんで、それが歌となり、帥宮挽歌群と呼ばれるほど数多くの歌ができたのであろう。

## 帥走の晦の夜

なき人の来る夜と聞けど君もなしわが住む里や魂なきの里(943)

火桶にひとりあて

向ひみて見るにも悲し煙りにし人を桶火の灰によそへて (962)

以上二つの歌は私の好きな歌であるが、魂なきの里、煙、桶火の灰に故宮の影が感じられる。他の歌にも、川、泡、浪、雪、霞、などがあり、これらに共通して言えることは、総べてつかみどころがなく、頼りなく、はかない感じがする。それらが故宮の影なのである。帥宮挽歌群を読んでいると、帥宮を失った孤独な和泉式部の、悲しい叫びが聞こえてきそうである。「出家をひたすら思ひつつけながら、辛うじて踏みとどまった所でよまれたと思われるこれらの歌を前にすると、喪つたものがいかにかけがえないものであったかということ、身をもって確かめた趣がうかがえる」(王朝女流文学史 清水文雄)。

## 第二章 死への想い

和泉式部は、数多くの人の死に遭遇している。

「太皇太后昌子崩御 長保元年(九九九)

彈正宮薨去 同四年(一〇〇二)

性空上人入寂 寛弘四年(一〇〇七)

帥宮薨去

同

橘道貞死去

長和五年(一〇一六)

小式部死去

万寿二年(一〇二五)

藤原道長死去

同四年(一〇二七)

一条天皇崩御

長元九年(一〇三六)

藤原保昌死去

同

この間に、父母の死にも遭遇しているはずである」。(日本歌人講座 中古の歌人 和泉式部 清水文雄)そして悲しみもまた、数多く経験していることだろう。そんな和泉式部は、死についてどう思っているのだろうか? 和泉式部にとって死とは……………?

「和泉式部の家集には、死にまつわる歌、死をテーマにした歌が多い」(和泉式部 いのちの歌 篠塚純子)。とりわけ和泉式部の思い入れが深いのは、第一章でとりあげた帥宮挽歌、そして最初の夫、橘道貞とのあいだに生まれた子小式部内侍を悼む歌、小式部挽歌だと思われる。

内侍のうせたる頃、雪の降りて消えぬれば

などで君むなしき空に消えにけん淡雪だにもふればふる世に(482)

小式部内侍の死の悲しみを、淡雪をとりあげて詠んだ歌である。

宮より、「露置きたる唐衣まゐらせよ、経の表紙にせむ」と  
召したるに、結びつけたる

留め置きて誰をあはれと思ひけん子はまさるらん子はまさりけり  
(485)

「第四五句は、『子はまさるらん』と、まず死んだ娘の心を思いやって言い、『子はまさりけり』と、かつて親を喪った際、子供の健在のために慰められた自分の心を思い起して、思惟の抛りどころとしようとしている……………」(和泉式部 寺田透)。帥宮挽歌同様深い悲しみがうかがわれるが、血縁関係の死はどこか違うと思われ

る。和泉式部は、藤原道長に「うかれ女」と評され、異性関係において世間ではあまりよい印象を与えていなかった。そして、

正月七日、親の勤事なりしほどに、若菜やるとて

こまこまに生ふとは聞けど無き名をば何らは今日も人のつみける

(252)

返し、親

無き名ぞといふ人もなし君が身に生ひのみつむと聞くぞ苦しき

(253)

と、親から勘当されていたことがわかる。孤独な和泉式部のため息が聞こえてきそうだ。しかしいくら勘当されていても親は親、やはり親の死は和泉式部にとって、大きなショックだったろう。小式部内侍の死も同様である。

しかし、次のような歌もまた、和泉式部は歌っている。

例よりもうたて物こそ悲しけれわが世の果てになりやしぬらん

(273)

類よりもひとり離れて知る人もなく越えん死出の山道 (309)

世の中に憂き身はなくて惜しと思ふ人の命をとどめましかば (339)

今日死なば明日まで物は思はじと思ふにだにもかなはぬぞうき

(553)

「和泉式部の家集には、帥宮挽歌、小式部挽歌など挽歌が多いのはもちろんのこと、和泉自身の死を想ふ歌も随所にみられる。自らの死の訪れる瞬間を式部は常に思い思っているかのようだ。彼女がその生涯を死と隣合わせに生きていたようにみえるのは、愛するものの死がいくつも彼女を通りすぎていったゆえかもしれない」(和泉式部 いのちの歌 篠塚純子)と、述べられているように、先に挙げた四つの歌以外にも、数多く自らの死を歌っている。つらいことばかりあった世の中で、このまま生き続けていても昔のことばかり思い出して、余計やるせない、いっそのこと死んでしまった方がどんなに楽か、と和泉式部は幾度も考えたことであろう。しかし、それもできない、という極限の状態の和泉式部である。彼女は波乱万丈の生涯を送り、世間の人々からは恋愛歌人と呼ばれているのに、彼女は常に死を想っていたなんて、誰が思うだろう。

つれづれと空ぞ見らるる思ふ人天降り来ん物ならなくに (81)

「茫然として空を眺めている状態です。魂が身を抜け出て虚空をただようような境地であります。この歌は愛欲をかぎりなく昇華している世界とも言えるでしょう。和泉式部の歌と人生の原型のような作品であります。ひたすらに人を待ち—来るとは思っていないのに—自分の魂の在処を虚空に見つめながら、世界の無をはっきりと見ているような一首であります」(古典の中の女流歌人下巻 和泉式部 前登志夫)。

また、人の葬送するを見て

立ちのぼる煙につけて思ふかないつまたわれを人のかく見ん(162)

死んだ人が煙になって天へ上っていくのを見て、和泉式部も、自分の死後人がこんな風に立ちのぼる煙を見るであろうと思つてゐるのである。

寝し床に魂なき骸をとめたらば無げのあはれと人も見よかし(311)

観身岸額離根草、論命江頭不繫舟(みをくわんすればきしのひたいにねをはなれたるくさ、いのちをろ(ん)ずればえのほとりにつながざるふね)という一連の詩句を、一文字ずつとり、歌の頭にした歌の最後の「ね」の歌である。「まぢかに迫つた死を感じたときの歌ではないかと思う。わが生涯の愛の遍歴の跡をとどめる恋の寝床に、ただ一個の『魂なき骸』をとどめたとしたら、人々よ、せめて、うわべの哀れなりとかけてやってください、という意味である。『魂なき骸』ならば、もうすでに『自分』とはかかわりのない、一個の物体であるはずであるが、和泉はここでも、客体化された『自分』を見ているようである(王朝女流文学史 清水文雄)。

以上三つの歌は、どれも自分の死後、自分を思い出してしのんでくれる人を歌っている。死んだ自分を見つけている人を描いている。前にも述べたが、和泉式部は常に死を想い想いしたり、このように自分の死後を他人が見た所を描いたりして、おそらく王朝女流歌人の中で、彼女みたいな人はいなかったであろう。

彼女の歌の中には、「つれづれ」という言葉や「憂き」という言

葉がよく使われている。心に求めるものがありながら満たされず、所在なく、ひとり思いにふけり、ものさびしい状態も経験し、憂き世のはけ口として自分を慰めてくれるのが歌だったのである。だから自然に「つれづれ」「はかなし」が多くなり、「放心のポーズ」などという和泉式部独自の世界がつけられたものと思われる。

### 第三章 死 へ

「和泉式部の没年は、その出生年時と同様、全く不明である。長元七年(一一〇三)の没とする説が最も早く、最もおくれるのは康平四年(一一〇六)説であるが、いずれとも決め難い。保昌が長元九年七十九歳で没しているので、おのずからこの前後となるのであるか(新潮日本古典集成 和泉式部日記・和泉式部集 野村精一校注)と、述べているように、はつきりしない。しかし「和泉式部統集の最後の部分を占める歌群などは、つぎつぎと愛する人を喪つてきた老年の孤愁が、ひしひしと感じられるような詠である」(日本歌人講座 中古の歌人 和泉式部 清水文雄)。

五日、端近う行ひして眺むれば、雲のけしきもいとあはれに  
おぼゆれば

西へゆく雲に乗りなんと思ふ身の心ばかりは北へゆくかな(1526)

「西へゆく雲」とは、西方浄土の方へ流れてゆく雲、「北へゆくかな」とは、思い人のいる方向のことである。死が迫ってきた式部の仏教思想をも詠んだ歌であろう。

七日、例ならぬ心地のみすれば、「今日やわが世の」とおぼゆる

生くべくもおもほえぬかな別れにし人の心ぞ命なりける (1528)

ようさり、まかり出でて文見るに、殿なりけるものを、まづ

あけて、いみじう言はれても、みづからのみ

ありはてぬ命待つ間の程ばかりいとかく物を思はずもがな (1549)

和泉式部続集の最後の歌である。「この『命待つ間』は実は、命の尽きる瞬間までのあいだの意だろう。存命と命終がひとつのものとして捉えられている」(和泉式部 寺田透)。

こうした死をまじかにした和泉式部の歌は、まるで自分への挽歌のようだ。死への想いが感じられる歌、そして自分の亡骸を他人が見ているような歌、今までいっしょに暮らしてきた愛する人達の死が、このような歌を詠ませたのであろう。恋の歌は数多くあり、私もとても好きなのであるが、なぜか挽歌が心に残ってしまふ。和泉式部独自の世界へ、引つ張り込まれるのである。どうしてであろうか? 「式部の歌は、内向的、墨絵的な印象を与える。まさしく男と女の恋を詠みながら、それが男と女の恋以上のものとなり得ているところに、式部の歌才と資質は象徴的に示されている。その詩人としての魅力は、自己愛と自己告発とをめぐりに共存させ……(中略……人の心といわず、事物のうつろいに敏いこの詩人は、女の肉体を謳って濁らず、恋に燃えても恋には酔わず、感覚によく観念をこめ、冷い幻想美に独特の歌境を見せている」(私の平安文学 竹西寛子)。

和泉式部の歌をつきつめていくと、以上述べられたような事になると思う。「自己愛」「自己告発」、彼女の歌は総て、この二つの言葉の中にありと言ったら、言いすぎであろうか。一番和泉式部が愛を注いだと思われる帥宮との愛、そして死別(彼女の思いと悲しみ)も、情熱的に、胸がしめつけられるように歌っているが、まるで悲劇のヒロインになった如く、自分で自分を苦しい方へ苦しい方へと、痛めつけているみたいである。これも「つれづれ」がなせる業なのであろうか。

私が大変興味を持ったのは、和泉式部の死に対する思いであるが、これは直に「自己愛」「自己告発」である。王朝時代に生きた人々の思想かどうか、勉強不足でよくわからないが、和泉式部が考える死後の世界は、完全な物理的滅亡でない。彼女はちゃんと生きている。しかし、自分が死後の世界に行ったら、という空想が働いているのである。死への恐怖というものは感じられない。和泉式部は死へと想いをはせながら、自分の歌の世界を創って行ったのである。それが和泉式部の魅力となり、「自己愛」と「自己告発」とを共存させて、抒情的な歌となると思われる。

播磨の聖の御許に、結縁のために聞えし

冥きより冥き道にぞ入りぬべきはるかに照らせ山の端の月 (151)

右の歌は、和泉式部が少女時代に、性空上人の許に仏道に縁を結ぶために送った歌である。「必死な祈りがあるんですけど、しかしそういう救われたい願望を持ちつつも、そこからついに救われることができなくて、その中で生涯苦しまざるを得なかったというのが、

かいつまんで言えば式部の生涯のあらましなんです」(古典の中の女流歌人 和泉式部 前登志夫)と、述べられているように、少女の時代にもう既に、先の人生を予感していたのだろうか。この「冥きより」の歌の想いは、和泉式部独特の世界の原点のような気がする。

### おわりに

四苦八苦しながら書き終えた今、残るものは自己嫌悪ばかりです。解釈も満足にできないのに、和泉式部の歌を悲しみを本当に理解することができたのだろうか。この論文で私は、和泉式部が死についてどういう考え方を持っているか研究したかった。果たして充分研究できるのだろうか、途中で何度も思ったことです。

最初和泉式部という女流歌人のことは、全くと言っていいほど知らなかった私が、この卒業論文のために和泉式部を知り、彼女の歌を読むことができて、とても嬉しいです。歌を読んでは共感したり、その歌の世界に引き込まれ、ため息をついたりした。

しかし、文を書くのがこんなに苦しいとは思わなかった。一行書くのに一時間かかったこともあった。こうした経験は、私にとってとてもプラスになったと思います。

### 参考文献

- 『古典の中の女流歌人』(下) 前登 志夫 教育出版センター  
『和泉式部』(日本詩人選) 寺田 透 筑摩書房  
『和泉式部』(日本歌人講座) 清水 文雄 弘文堂

『和泉式部集全釈続集篇』

『王朝女流文学史』

『和泉式部集・和泉式部続集』

『和泉式部日記』

『私の平安文学』

『和泉式部』

佐伯 梅友 笠間書房  
村上 治 登美  
小松 文雄 古川書房

清水 文雄 岩波書店  
清水 文雄 岩波書店  
篠塚 純子 至文堂

野村 精一 新潮社  
竹西 寛子 福武書店  
馬場あき子 美術公論社

### 〔評〕

一、「死」とは何か、という人類永遠のテーマを、和泉式部を対象として探ってゆこうとしたわけであるが、そのためには和泉の作品は、測り知れぬ質と量の問題を提供してしてくれると思う。その上、その作品は、歌にしても日記にしても、最高度の芸術的昇華を遂げていて、読者の心をそそってやまない。あなたも、この和泉の魅力のとりことなった女性の一人である。

二、読み了えての感想は、和泉についての先輩の研究の引用が頻繁に見られることはよいとして、和泉の作品の表象に直接当たって、そこから自分なりに納得のいくものを引き出す配慮と努力が不足しているように思う。

三、しかし、ここに取り上げられた問題は、基本的にはあなたの生涯のテーマとなつてゆくはずのものである。(清水 文雄)